

天^{てん}

狗^ぐ

火^び

それは、秋晴れの天気の良い日でした。

仲よしの庄助^{しゅうすけ}さんと太助^{たすけ}さんは、^{魚とり}ぼんつくの相談をしていました。

「なあ、庄助、きのうは、雨が降^ふって川の水が増^ふえとるだろうで、きつとたくさん魚が取れるぞ。」

「ああ、ふなやこい、それにどじょう、ひよつとしたらうなぎが取れるかもな。」

ふたりは、楽しそうに話しながら、川までやってきました。

「おい、思った通りだ。水のかさが増えとるぞ。」

「それじゃあ、そろそろ始めるか。」

ふたりは、さっそく川の中に入って川の水をせきとめ、手おけで水をかい出し始めました。

「よいしょ。こらしよ。」

力を合わせて川の水をかい出しましたが、魚が見えるまでかい出すのは簡単^{かんたん}なことではありませんでした。それでもしばらくすると、やがて大きなふなの背びれが見える

ようになつてきました。

「ああ、おる、おる。たくさんおるぞ、庄助。」

「こつちもたくさんおるぞ。もう少しだ。それそれ。」

「なあ、庄助。おまえ、天狗火の話を知つとるかの。」

「ああ。うわさには聞いたとるけど。何やら、天狗が森の中に住んでいて、いつも川の番をしているらしいな。それで川の魚を勝手にとると、天狗がおこつて人を化かすそうだ。」

「だったら、わしら、天狗に化かされるんじゃないか。何か天狗の好物こうぶつでもあげよまい。庄助、お前、天狗の好きな物、知つとるか。」

「好物は、魚らしいぞ。」

「だったら、森へ行つてふなの五・六びきでも天狗にお供そなえしたらどうだ。」

「何いつとる。そんなものは、迷信めいしんに決きまつとる。気にせんほうがええ。それにだいいち、天狗にやつたらもつたいないが……。」

「そうだな。」

ふたりは、痛いたくなつたこしをたたきながら、また、水をかい出し始めました。

そのときです。それまで雲一つなかつた空がくもつてきて、急になま暖あたたかい風がふ

いてきました。そして、田んぼのすみの方でつぼけが、ぼおつと燃え出しました。

（稲むら）

「あつ、庄助、つぼけが燃えとる。」

「あつ、本当だが。」

庄助と太助は、急いでつぼけにかけ寄つていきました。しかし、燃えていたはずのつぼけはなんともありませんでした。

「変だなあ。ついさっきまで、燃えとつたのに。」

と、ふたりは顔を見合わせました。

すると、どうでしょう。また、となりの田んぼのつぼけが燃えています。

「あつ、また燃えとる。」

「本当だ。行ってみよう。」

急いでふたりが走っていくと、今度も何ともありませんでした。

庄助と太助は変な顔をして、元の川のところへもどつてきました。そして、手おけをひろつて、また水をかい出そうとしたとき、太助がいました。

「庄助よ、おかしいぞ。ふながおらんが。」

「そんなばかな……。あれ、本当だ。」

ふたりは、あちこちのくぼみに手をつつこんでみましたが、先ほどまでピチャピチャ

はねていたふなもこいもい
ませんでした。

「変だなあ。いったいどう
しただ。」

「魚はどこへ行っただ。」

ふたりは、しばらく考えこ
んでいました。

「おい、庄助、これは、天
狗のせいじゃにやあのか。
さつきつぼけが燃えたの
は天狗火だて。」

「あれが、天狗火か。」

「きつと、勝手に魚をとつ
たから天狗がおこったん
だぞ。」

「そうかなあ。」



「だで、天狗にふなをお供えすればよかつたんだて。庄助が欲張^{よくば}って、天狗にやるのはもつたいないなんていうもんで。」

「ごめんな。」

「庄助、わしは先に帰る。」

太助は、魚を全部天狗にとられたので、おこつて先に帰つてしまいました。

「あああ、太助のいうことを聞いたときやあよかつた。」

庄助もすっかりしよげかえつて、太助が放りつばなしにしていった手おけを拾^{ひろ}つて、とぼとぼと野道を帰つていきました。

横根に伝わる話です。

魚とりをした川は、境川と並ぶようにして流れている小川です。

天狗は、鼻が長く、つばさがあつて自由に空を飛ぶことができ、おまけに神通力をつかう想像上の怪物です。そこで、不思議な現象を天狗のしわざとして、天狗笑い・天狗ゆすり・天狗火などというようになりました。